

「今、自然史系博物館は…」の特集号にあたって

豊 遙 秋¹⁾

1980年8月地質標本館がこのつくばに開館したその当時、全国には約3,000余りの博物館、または博物館相当施設が存在した。その後一年間に200から300の博物館が全国に設置され、その総数は8,000館に達しようとしている。このような背景の中で博物館の社会的位置づけは単なる“珍しいもの”が展示され保存されている所から、人々の生涯学習の要請に応える社会教育施設へと変わりつつあり、地質標本館もこの動きとは無縁ではなくなってきた。当館が博物館法で定める博物館ではないものの、地球科学に関する総合的な“博物館”として、多くの標本を使用した展示を通して日本の地質や資源、火山、地震等に関して、研究所としての地質調査所の活動と成果を社会に紹介するとともに、地球科学全般の普及と教育の一翼を担っていることも事実である。専任の研究者は館長を含め7人が在籍し調査・研究活動はもちろん、館の展示、普及等の運営にかかわるとともに、40万点以上の岩石・鉱物・化石標本の登録と管理、その利用についても責任を負い、標本のデータベース化は1980年以来取り組んでいる。このような標本館で行われている業務は、いわゆる博物館が本来行っている活動とは何ら変わらないものである。

1997年に行われた日本古生物学会でシンポジウム「今、自然史系博物館は…」が企画され、各地の自然史博物館の第一線の地学担当の学芸員の方々から博物館にかかわる様々なテーマで問題が提起され、報告と討論が行われた。その時のテ-

マである博物館の役割と機能、研究の重要性、展示のあり方、標本の管理・利用等について博物館の現場から出てきたものばかりで、これまでに例のない密度の高い有意義なシンポジウムであった。これまで博物館に関する問題は「社会教育施設としての博物館」について漠然とした議論が行われたり、「標本資料データベース」や、「資料情報ネットワーク」等専門的かつ個別的問題について議論されたことはあるが、このように本質的な部分で、自然史系博物館の現状について総合的に取り上げられたことはなかったと思われる。このシンポジウムで行われた報告をその場限りのものに済ませないために、地質ニュースでこのテーマをそのまま取り上げ、特集号「今、自然史系博物館は…」とし、シンポジウムで発表した内容を柱にまとめることとした。このシンポジウムで報告する機会を持つことができなかつた地質標本館における地質標本のデータベース及び、標本の利用についてはここに、新たに原稿を加えた。また、シンポジウムでは取り上げなかつた博物館の普及に関する論文を栃木県立博物館の青島陸治氏にお願いした。自然史系博物館のかかえる問題を様々な視点からとらえたこの特集は、今後「学芸員」、「調査・研究」、「展示」、「資料情報」、「標本管理」、「ボランティア」等個々の問題について更に議論を積み重ねてゆく必要があるだろう。このシンポジウムを企画し、本誌の特集として編集の労をとられた豊橋市自然史博物館の松岡敬二氏に感謝の意を表します。

1) 地質調査所 地質標本館